

日本学術会議言語・文学委員会、文化の邂逅と言語分科会共同主催シンポジウム  
2019年3月23日（後援：東京大学教養学部英語部会）  
「学術から考える英語教育問題：CEFR、入試改革、高大接続」

## 「複言語複文化主義から生まれた CEFR：その目的と理念」

立教大学名誉教授 鳥飼玖美子

### 1. 外国語教授法の変遷と CEFR

- 文法訳読法 (Grammar-Translation Method)
- デイレクト・メソッド(Direct Method, Berlitz Method)  
学習言語のみを使用する単一言語アプローチ、1900-20 年代
- オーディオリンガル・メソッド(Audiolingual Method)  
構造言語学・行動主義心理学、1960 年代
- コミュニカティブ・アプローチ (Communicative Approach)  
機能言語学・社会言語学、1970 年代

### 2. 日本の英語教育改革と CEFR

#### 1) 「英語を話したい」日本人と慢性的英語教育改革

- 「実用か教養か」（平泉渉・渡部昇一）論争(1974)
- 臨教審による抜本的英語教育改革への提言(1986)
- 学習指導要領改訂（1989）「オーラル・コミュニケーション」
- 「「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」（2003-2007）
- 「グローバル人材育成戦略」（2012）
- 文科省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013）
- 新学習指導要領（2020 より順次施行）  
小学校5・6年「教科としての英語」、大学入試改革

#### 2) 大学入学共通テストにおける英語

高大接続→「4技能」を測定→民間試験（7団体8種類、レベル別で23種類）

- 学習指導要領に準拠していない
- 高校英語教育が民間試験を目指した受検対策へ傾斜
- 受検料負担＝家庭の経済力による格差
- 試験会場不足＝地域格差

- 透明性への懸念（採点基準の妥当性、採点者間の一致という信頼性、出題ミス）
- 実施団体が問題集を販売、受検指導を実施するなどの利益相反
- 高校が試験会場、高校教員が試験監督は許されるのか
- **各試験の目的・内容・受検料等がバラバラで公平性が保証されない**

### 3) 対照表として CEFR を活用

\* 林芳正・文部科学大臣の衆議院文部科学委員会における答弁

- 「各試験のスコアに加えて、外国語の能力をはかる国際的指標である CEFRの六段階評価をあわせて各大学に提供する」
- 「各資格検定試験の実施団体におきまして、欧州評議会の定めるルールにのっとりまして、試験のスコアとCEFRとの対応関係について専門家による検証を実施する」(2018.6.6)
- 「民間試験の成績の活用方法は、各大学において決定すべきものであり、必ずしも対照表に基づくことを要しない」 (2018.7.27)

\* 欧州評議会の見解

「共通参照レベルは形式を変え、精度を変えて使ってもよい」 (CEFR, 2001)

「CEFRは、外国語教育改善のために策定されたものであり、標準化に使うツールではない。調整したり監視する機関はない」 (Companion Volume, 2018)

\* CEFR Common Reference Levels (共通参照レベル) <対照表に使用予定>

- CEFR(2001) 6段階  
「基礎段階の言語使用者 A1,A2」 「自立した言語使用者 B1,B2」  
「熟達した言語使用者 C1, C2」
- CEFR Companion Volume(2018) 1 1段階
  - 1) A レベルの下に、pre-A1 (A1 以下) レベルを新設
  - 2) A2, B1, B2 には、それぞれ plus レベルを追加することで細分化
  - 3) Above C2 (C2 以上) 追加 (プロ通訳者翻訳者は CEFR 参照レベルを超える)

### 3. 欧州評議会の言語政策

1) 「ヨーロッパにおける多様な言語と文化の豊かな遺産は価値のある共通資源であり保護され発展させるべきものであることに鑑み、その多様性を、コミュニケーションの障壁から相互の豊穡と理解の源へ転換するには教育における多大な努力が必要だと考える」

(Council of Europe, Committee of Ministers, Preamble to Recommendation R(82)18)

## 2) 複言語複文化主義

- 多言語主義(multilingualism)=多様な言語が共存している状態  
EU の「多言語主義」=多くの言語が共存することを可能にする
- 欧州評議会の複言語主義 (Plurilingualism)=母語以外に二つの言語を学ぶ  
他者の言語と文化を学ぶことで全人的な発達と相互理解へ  
多様な言語体験が相互に関連してコミュニケーション能力を作る  
言語は生涯かけて学ぶもの

## 4. CEFR の目的と理念

### Common European Framework of Reference for Languages

「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」(Council of Europe, 2001)

- 複言語主義を具現化する為に策定された参照枠
- 国際理解を深め、生涯学習を促進し、学校における言語教育の質を高める  
1964年から研究を開始、2001年に完成、40言語で使用
- 「カリキュラム・指導・評価」の一貫性と透明性
- 言語能力の複雑さを論じ、言語学習の目的と成果について考え伝えるための  
メタ言語を提供する
- カリキュラム開発と教員研修に刺激を与える
- 評価のための透明性と明確な参照点を提供する目的だけでなく、  
カリキュラム改革と教授法に資するために使う
- 言語熟達度を微細に分類
- 能力記述文(Can Do descriptors)は熟達度を評価、学習行程を明確にし共有する  
学習の進捗を測る上で、試験の点数だけに焦点を当てるより、はるかに  
微妙な違いを見ることができる
- 部分的な能力を許容する
- 自己評価も客観評価も可能
- 個別言語にとらわれず全ての言語に応用可能

(CEFR Companion Volume, 2018, p.21, 22, 25)

### CEFR COMPANION VOLUME (増補版) の主要な変更点

- コミュニカティブ・アプローチから脱却
- 「4技能」から「4モード(様式)7技能」へ

「伝統的な4技能はコミュニケーションの複雑な現実を捉えるには不十分」

→ four modes of communication = reception, production, interaction, mediation

[受容 (聞くこと・読むこと)] [産出 (話すこと・書くこと)]

[相互行為 (話すことのやりとり・書くことのやりとり)] [仲介]

- 「仲介」 (mediation) の内容を拡張  
言語、テキスト、概念、コミュニケーション、学び = 「仲介」
- 参照レベルの追加 (6段階から11段階)
- 能力記述文から「母語話者」 (native speaker) を削除  
理想的な母語話者を目指さない
- コミュニケーション能力 = 「複言語複文化能力」

#### 4) CEFR A2 レベル 能力記述文の一例

- 聞くこと (会話、講義、アナウンスなどを聞く)  
「ゆっくり、はっきり話してもらえれば、具体的なことに対応できるくらいは理解できる」
- 読むこと (手紙、指示、情報、議論、本などを読む)  
「具体的で身近な内容が日常的に使う言葉で書かれ、短い簡単なテキストなら理解できる」
- 話すこと (体験、情報、意見などを言える)  
「人物や周囲の環境、日常的な行動、好き嫌いなどについて簡単な文で言える」
- 書くこと (創作、レポート、エッセイなどを書く)  
「簡単な接続詞 (and, but, because など) を使って簡単な文章を書ける」
- やりとり (会話、討論、会議での議論、意見交換、インタビューでの対話)  
「日常的な場面で身近な話題についてなら、質問をしたり答えたりできる」

#### 5. 日本の英語教育が CEFR から学ぶこと

- 言語とコミュニケーションの複雑性についての知見  
コンテキスト (文化、状況、参与者)
- 「話す」ことの多面性と多層性への認識
- 外国語は生涯かけて学ぶもの = 学習者の自律性涵養
- 異質な言語を学ぶことは異質な世界を知り自分の世界を相対化すること

[参考文献]

- Byram, M. (Ed.).(2003). *Intercultural competence*. Strasbourg: Council of Europe.
- Council of Europe (2001) . *Common European Framework of Reference for Languages*.
- Council of Europe (2018). *CEFR Companion Volume*.
- 南風原朝和（編）(2018)『検証 迷走する英語入試：スピーキング導入と民間委託』  
岩波ブックレット No.984、岩波書店
- 南風原朝和 (2019)「英語民間試験の導入 粗い制度設計 『被害』なくせ」日本経済  
新聞教育面 1月14日付
- 細川英雄・西山教行（2010）『複言語・複文化主義とは何か：ヨーロッパの理  
念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版
- キース・モロウ（編）和田稔他（訳）(2013)『ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）  
から学ぶ英語教育』研究社 [Morrow, K. (Ed.). (2004). *Insights from the Common  
European Framework*. Oxford University Press.]
- 鳥飼玖美子（2014）『英語教育論争から考える』みすず書房
- 鳥飼玖美子（編）榎本剛士・藤森千尋・綾部保志・細井健・小河園子・長沼君主  
(2013) 『自律した学習者を育てる英語教育の探求：小中高大を接続するこ  
とばの教育として—ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）についての研究』  
中央教育研究所 研究報告 No.80.
- 鳥飼玖美子（2018）『英語教育の危機』ちくま新書、筑摩書房
- 鳥飼玖美子（2018）「英語教育改革 まず検証を 「話す力」求め一直線 30年、成  
果乏しく」日経新聞教育面 6月4日付
- 鳥飼玖美子（2018）「複数の英語試験 入試活用 「欧州基準」で換算不適切」  
日経新聞教育面 9月17日付
- 鳥飼玖美子(2018)「発言 公平性保てぬ英語民間試験」毎日新聞教育面 10月  
18日付